

●二人で味わう古典和歌(91)

下紅葉したもみぢかつ散る山の夕時雨ゆふしぐれ濡れてやひとり鹿の鳴くらん

藤原家隆

『新古今和歌集』「秋」の一首。

「紅葉の下葉が散って山に時雨の降る夕べ、その時雨に濡れて、牡鹿がひとり妻を求めて鳴いているのだろうか」。秋に切なげに鳴く鹿は、恋の季節の牡鹿である。「下紅葉」

「夕時雨」「濡れてやひとり」など、美しい映像とともに幽艶な詩情極まる新古今調の名歌である。作者の家隆は、藤原俊成に学び、『新古今集』撰者の一人でもあった。

『古今集』「秋」の部の「上」「下」と同じく、『新古今集』「秋・上」は風の歌群で始まる。ところが「秋・下」

の始まりは鹿の歌。右の一首を筆頭に、歌の名手たちによる、それぞれに魅力的な鹿の歌十六首。『新古今集』を手にとるたび、まずは「秋・下」の鹿たちに会いたくなる。

野分せし小野の草臥くさぶかし荒れ果ててみ山に深きさ牡鹿せしかの

声

寂連



(野分のせいで野の草の上の臥所はすっかり荒れ果ててしまい、山深く入って鳴くのが聞こえる牡鹿の声よ) たくへくる松の嵐やたゆむらん尾おの上に帰るさ牡鹿の

声

藤原良経

(牡鹿の声をともなって吹いてくる松の風が衰えているのだろうか。山の峰のほうに遠ざかってゆくように

聞こえる牡鹿の声よ)

小山田をぐまだの庵いは近く鳴く鹿の音におどろかさされておどろかさかな

西行

(山田の庵の近くで鳴く鹿の声に驚かされて目を覚まし、あわてて鳴子を鳴らすなどして、その鹿を驚かすことよ)

寂連の歌の、荒涼とした野分の風情。良経の歌の、聴覚による空間の奥行き。西行の歌の、生活実感を生かしたユ一モア。想像力と表現力のゆたかさ、変化に富んだ十六首の見事さにくつとりする。

家隆の一首は、後鳥羽院の命によりこの「秋・下」の巻頭に据えられたという。(小島ゆかり)